Case 3 ▶▶▶

特別捜査部　主任捜査官

国家公務員一般職（大卒程度）採用・経営学部出身・入庁１１年目・男性

01 PAST

――「誰かのために」と誓った気持ちは、今も揺らがない

Q：入庁前のどんな経験が、現在の業務に生きていると思いますか。

A：大学時代に、**東日本大震災の被災地で物資配給のボランティア**を経験しました。被災された方々から感謝の言葉をいただき、**「損得ではなく、純粋に人の役に立ちたい」**と感じた気持ちが、今の私の原動力となっています。

Q：他部署での経験と現在の業務はどのように関連がありますか。

A：他部署ではなく、他機関の経験にはなるのですが、私は、入庁６年目に、インサイダー取引などの不正な株取引を取り締まる**証券取引等監視委員会（通称：SESC）に人事交流で２年間出向**したことがあります。SESC は、事件を検察官に告発するために様々な調査を行っており、そこで得た知識と経験が、現在所属している特別捜査部での捜査に大きく生かされています。このように、**大阪地検には国税局や法務省本省等で勤務する機会もあり**、こういった機会が与えられることは大阪地検で働く魅力のひとつだと思います。

「自分の性格と、入庁後の経験がつながり、レベルの高い業務に挑戦できるようになる。それを日々実感できるのが、検察庁という職場の魅力ですね。」

02 PRESENT

——基礎を磨き、自分の限界に挑み続ける

Q：現在の業務に従事する中で、やりがいを感じる瞬間はありますか。

A：**正解のない問いに対し、自らの最適解を導き出すプロセス**に醍醐味を感じています。

捜査手法は千差万別。先達の技術から学びつつ、自分だけの工夫を凝らして真実に迫る過程には、**自らの思考の限界に挑むような感覚**があります。

また、知識・経験豊富な検察官や事務官の先輩方とワンチームとなって任務を完遂した瞬間の高揚感、他では経験できない捜索（ガサ）や逮捕といった緊迫の現場対応、そして共に汗を流す若手職員の成長。この仕事でしか感じられないやりがいは、列挙していけばきりがありません。

Q：業務に従事する中で、自分なりに工夫や努力をしていることがあれば教えてください。

A：捜査では、**一見無関係に見える情報の断片が、後に決定的な証拠へとつながる**ことがあります。常にアンテナを高く張り、情報を収集し、記憶にとどめておく。そして何より、心身ともにタフであるために「よく食べ、よく動き、よく眠る」。どんなに難解な事案を担当する際でも、捜査官として最高のパフォーマンスを発揮するためには、**基礎を徹底することが何よりも大切**だと日々感じます。

「これまでの人生で最も充実している。そう断言できるほど、特捜部の業務は魅力的です。」

03 FUTURE

——大阪地検特捜部が育てた、次なるリーダーの視点

Q：大阪地検特捜部で得たスキルを、今後のキャリアにどう生かしていきたいですか。

A：極限の現場で培った**「協調性」**と**「育成力」**を、次のステージへとつなげていきたいです。ここまでも何度も述べていますが、独自捜査の最前線である大阪地検特捜部で学んだ、**捜査の場面においての協調性や、後輩の指導・育成の経験**は、私にとって大きな財産です。これを、特捜部や他部署においても還元し、一つの真実を愚直に追い求めることのやりがいを後輩たちに伝えていける、**組織全体の士気や能力を底上げできるリーダー**になりたいと考えています。

Q：今後、どのように活躍し、検察庁へ貢献していきたいと考えていますか。

A：あらゆる手法を駆使して真実を突き止める**「捜査のスペシャリスト」**を志しています。そのために、多種多様な事件の最前線で経験を積み、どんなに複雑な事案であっても真実に迫ることのできる高い捜査能力を身につけたいです。また、捜査の技術を磨くだけでなく、**公正不偏な視点**や、被害者の方・御遺族の方の心情にも配慮できる**人間力**を兼ね備え、**上司や同僚からはもちろん、国民の皆様からも信頼していただける検察事務官**となり、社会正義の実現のため活躍していきたいです。

「大阪地検特捜部でしか得られないものが確かにあります。捜査官としての理想の姿に一歩でも近づけるよう、地道に努力し続けたいですね。」